『現代カンボジア短篇集』

岡田知子編
財団法人大同生命国際文化基金

カンボジアの文学作品が日本語に翻訳され一冊の本として出版されたことはこれまでになく、本書が最初であるとのことである。

カンボジアは一九五三年フランスの植民地支配を脱し独立してから今日まで、五回も政治体制・国名が変るという激動と混乱と苦難の歴史を歩んできた。特に七五年から七九年まで政権を執ったポル・ポト派は毛沢東思想を信奉し、従来の社会・経済体系を否定し、中国の文化大革命に倣った過激な共産化政策を実施し、この過程で徹底した文化破壊が行われた。その破壊は高学歴であったり知的職業に就いていたということだけで殺す、文化の担い手そのものを抹殺してしまうという徹底ぶりであった。この間、飢餓・病気そして粛清という名で行われた大量虐殺によって多くの人が命を落した。その数はおよそ国民の三分の一、二百万ともいわれる。

こうした中で文学の状況はどうなっていたのか、そしているのか。訳者は「解説」で「カンボジアの作家はいつの時代にも表現の自由を享受できず、あらゆる障害や葛藤に苦悩しながら創作活動を行ってきた。現在でも程度の差はあれ、その状況は改善されていない」、ポル・ポト政権に続くベトナム指導型のヘン・サムリン政権下でも「文学作品はすべて党の宣伝の道具とされ、「政策に従って不本意な作品を量産することを強制された」と語っている。

カンボジアの文学をめぐる厳しい状況はこれだけにとどまらない。カンボジアではいまだ識字率が低く、庶民が書物に触れる機会は学校教育以外の場では皆無であり、文学作品は稀に雑誌・新聞等に発表されるだけで、それもほぼプノンペンにおいてのみ、という状況であるという。作品は読まれて作品として成立する。口承文芸などを考慮の外に置くならば、文学の成立基盤自体が極めて脆弱なのだ。

こうした状況では文学作品の収集からして困難である。「訳者あとがき」によれば、収集するには「カンボジアで唯一真の本屋と呼べるアプサラ堂という本屋」（この書店はポル・ポト政権崩壊後、「書籍を求めて各地を行脚し、壁紙や包装紙にされていた本を譲り受け、買い取り、一冊又一冊と収集した」という）に行くか、街で文房具等を売る小さなスタンドを回るか、あるいは「たいていは居間の片隅で他の紙やぼろ布と一緒に埃にまみれている」個人の蔵書を見せてもらうか、であるという。

本書には、一九六〇年代から九〇年代末に発表された五人の作家の十三篇の短編小説が発表された年代に従って収められている。訳者が「灼熱の太陽を浴び、汗だくになりながら掘り出し物のありそうなところを一軒一軒見て回る」中で探し出した作品である。

作品の完成度は必ずしも高いとは言えない、また粛清・大量虐殺の時代を生き抜いたカンボジアの人々の姿、その思い・苦しみ・悲しみを直接描いた作品はまだ書かれていないのだろうか、本書には収められてはいない。カンボジア文学の状況についてはほとんど知らないが、このこと自体がカンボジア文学の置かれてきた、そして今置かれている状況を物語ってもいるのだろう。そう思われる。

ポル・ポト派が手本とした文化大革命の時期、中国もポル・ポト政権下と同じような状況を経験した。この間に命を落とした文学者も少なくない。建国後相次いだ批判運動そして文化大革命を生き抜いた中国の文学者たちは今、文化大革命後の新たな状況の中で、その体験を風化させぬよう、民族の忘れてはならぬ記憶・次世代への負の遺産として、それがどのようなものであったのか、それをもたらしたのは何であったのかを問い続け、書き続けている。「作家個人の記憶は作品として記録され、それはやがて読者一人一人の記憶となり、さらには一民族の歴史の記憶となる」(本書「解説」)。「民族の歴史の記憶」となる作品が自由に書ける日が一日も早くカンボジアに訪れることを願わずにはいられない。

紙幅はすでに尽きたが、特に印象に残った作品としてポロ・ポト政権時代を経験していない新しい世代の作家マイ・ソン・ソティアリーの「姉さん」と「なぜ」を挙げておきたい。前者は弟妹を大学に行かせるために売春する姉を弟の側から描き、後者は弟妹の学費食費がなく追い詰められてバイクの強奪にはしる少年を描いた作品である。

もう一つ、気がついたことを書き添えておく。プノンペン大学でカンボジア及び中国文学を教えているスム・チュム・ブン教授の作家祖ティーとしてのデビュー作だという「英雄の像」は中国の著名な作家葉聖陶(一八九四～一九八八)が一九二九年に書いた童話「古代英雄の石像」と偶然とは思えないほど内容が酷似している。葉聖陶の作品は中国ではよく知られている。両作品のあらすじは――英雄を記念するために彫刻家が大きな石で英雄の像を彫り、削り落とした小石で台座を作る。広場の中心に立ち、人の崇拝の的となった英雄の像は傲慢になり、台座の小石たちを見下す。小石たちはもともと一つの石であったし、今でも自分達のお蔭で高と立っていられるのだ、自分達がいなくなったらお前は倒れて粉になるのだ、と反発する。石像は傲慢な態度を改めない。台座の小石たちは覚悟を決める。夜更け、石像は突然倒れ、台座もろとも砕けて石の山になってしまう。その後石たちは一緒に道路に敷かれ、人の役に立つ――というものである。二つの作品は一体どのような関係にあるのか、興味をそそられる。

本書は訳者の地道な努力と熱意、そしてカンボジアによせる熱い思いによって成った書であると思う。お蔭でカンボジアの文学作品をまとめて読むことができた。本書の出版を心から喜びたい。

(小林二男)